

Round-table discussion

座談会

「道の駅」と
地域の活性化

■出席者(五十音順)

片山健也氏(ニセコ町長)

徳永哲雄氏(弟子屈町長)

原田裕氏(恵庭市長)

■コーディネーター

小磯修二氏

(北海道大学公共政策大学院特任教授)



直売所や地域の特産品を販売する空間を併設し、経済の活性化や地域振興に寄与する「道の駅」が増えています。また、近年は「道の駅」が防災拠点として大きな役割を果たしている例も見られています。

そこで、「道の駅」を地域の活性化に効果的に活用している自治体のトップの皆さんから、「道の駅」の活性化と地域振興についてお話をお聞きました。

(本座談会は2015年12月24日に札幌市内で開催しました)

それぞれの「道の駅」の特徴

小磯 1993年に登録が始まった「道の駅」も20年以上の歴史を重ねています。当初は休憩やトイレ、情報提供などドライバーの不便を解消する機能が中心でしたが、次第に農産物直売など地元産品の販売で、多

くの観光客や地元客が集まる消費の拠点として進化してきました。地域経済の活性化の拠点として、大切な地域の社会インフラとなってきているように思います。これからは、地方創生戦略など地域に求められている課題やテーマの解決に向けて、どのように「道の駅」を活用していくのかという視点が必要だと思います。

「道の駅」は、地域の創意工夫が生かせる空間であり、装置です。そこで、今日はさまざまな工夫によって「道の駅」を有効活用しておられるニセコ町、弟子屈町、恵庭市の首長さんに集まっていただきました。これまでの経験を



お聞きしながら、これからの「道の駅」の活用方向について、一緒に考えていきたいと思っております。

まず、それぞれの「道の駅」の特徴についてご紹介いただきたいと思います。一番登録が早かった「道の駅摩周温泉」の弟子屈町の徳永町長からお願いいたします。

徳永 当町の「道の駅摩周温泉」は、90年に摩周湖温泉観光案内所としてオープンしていましたが、24時間トイレ、常駐の観光案内人、駐車場などの機能を満たしていたことから93年4月に登録されました。

ところが、トイレなどへの苦情が多く、バリアフリー化もされていなかったため、道路を挟んであった旧ヨーロッパ民芸館（2008年に閉鎖）を町で買収し、11年7月にリニューアルオープンしました。今はトイレの数も増え、足湯もあります。本館やトイレは温泉暖房なので、いつも暖かい「道の駅」です。

リニューアル後は平均滞在時間が長くなったほか、職員が自主的にトイレ清掃をするなど、いろいろな効果が出ています。ヨーロッパ風の建物と花で飾られた「道の駅」で、町内を訪れる観光客の半分から3分の1くらいが立ち寄ってくれています。また、リニューアル後は近隣市町村の人たちも立ち寄ってくれるようになりました。花のきれいな時期になると、週に何度も来てくれる人がいるほどです。

片山 当町の「道の駅ニセコビュープラザ」は、観光インフォメーションをどうするかという議論から発展したものです。以前からニセコ町には、貸し切りバスを停めるところがない、トイレがないといわれていました。観光協会も週末は閉鎖していたので、観光インフォメーションとトイレを何とかしようということからスタートし、全くの白紙から議論を始めました。ですから、当初は「道の駅」という発想はありませんでした。現在のニセコビュープラザは国道と道道が交差する場所で交通量が多く、場所の選定は比較的簡単に決まりました。また、若い世代に借金を残さない、ほかの地域と競争しない身の丈にあったものにする、民間の圧迫をしないという三つのことを取り決めました。議論を進める中で「道の駅」の情報を得て、それを

活用しようということで97年4月に登録され、5月にオープンしました。

原田 「道の駅花ロードえにわ」は05年8月に登録され、翌年7月にオープンしました。国道36号沿いで、1日に3万台以上の交通量があるのですが、恵庭市は“通過されてしまうまち”という認識がありました。市内にはサケがのぼる川があり、恵庭溪谷の滝や豊かな田園風景、それに農産物もありますから、そうした魅力を発信する場として「道の駅」を計画しました。

われわれは「道と川の駅花ロードえにわ」と呼んでいて、これが大きな特徴です。国道と市内を流れるいざりがわ漁川の交差点に位置しており、08年に隣接する漁川河岸に多目的広場のウォーターガーデンがオープンしています。花を生かしたまちづくりの経験も生かし、花、水、緑、田園などをコンセプトにし、14年度は138万人の来館者数がありました。

地域経済の活性化に寄与する「道の駅」

小磯 近年、「道の駅」で大きな経済効果をもたらしているのが、農産物直売や地域の特産品販売だと思います。地域における経済波及効果をどのように見ておられますか。

片山 ニセコビュープラザの人気の一つが、農産物直売です。当初は7戸の農家から始まり、規格外の農産物を置いて、空き缶にお金を入れてもらうようなスタイルでした。これが人気となって、ニセコビュープラザ直売会として組織化され、現在は約70戸が加入しています。2002年からPOSのバーコードシステムを導入し、その後、独自



の商品補充と集荷システムも開発・導入しました。

1千万円以上の売り上げを誇る農家がいるほどですが、何より変わったのは農家の皆さんの意識です。以前は団体で視察に行くときなどに資金支援の要請がありましたが、今は一切ありません。自分たちのお金で、自分たちで運営する喜びを知って、行政に頼らず自分たちでやるという気概が生まれました。これは非常に大きな成果だと思っています。

農産物直売は約3億円の売り上げがあり、(株)ニセコリゾート観光協会が運営しているショップコーナーも8千万円ほどの売り上げがあります。地域の経済効果も大きいと思いますが、農家の皆さんの意識と地位の向上が大きな効果です。「道の駅」の直売をきっかけに、町内には個人で運営する直売所も出てきました。

今は直売所も通年でオープンしており、冬季の商品も工夫して出荷しています。また、町内産であることや品質についても細かな規定を決めて管理しています。農業者が消費者とダイレクトにつながることで、将来のリスク管理にもつながっていると思います。農家の自立という点では、非常に大きな成果につながっています。

ニセコビュープラザの運営は、直売所は直売会が、情報プラザなどは(株)ニセコリゾート観光協会が担っていますが、設立以来、町では運営自体に関与していません。「道の駅」の集客が、新たなサービスを生み出すなど、自主的に取り組んできていることが、まちの大きな力になっています。

原田 花ロードえにわは、100万人以上の来館者があることが何よりの効果です。農商工連携から生まれた商品を展示できるスペースがあり、アンテナショップの役割を果たしていることも地域経済に役立っています。人気の農畜産物直売所「^か花^の野菜」は4～11月の期間営業ですが、4億4千万円の売り上げがあります。直売所は約70戸が加入する協同組合で運営していますが、2千万円を売り上げる組合員がいるほどです。新しい農産物を作ることに熱心で、それが組合員同士の刺激になるなど、いろいろな相乗効果が出ています。物販やレストランのほか、ベーカリーも評判で、こ

れらで約2億円、直売所を合すると売り上げは6億円以上になります。農商工連携で観光協会や商工会議所が率先していろいろな商品開発をしているので、地域振興、商業振興に大いに役立っていると思います。

敷地内にある花壇や花時計は、市民ボランティアの「花サポーター」の皆さんが定期的に維持管理に協力してくれており、市民参加の場にもなっています。

徳永 摩周温泉は地域の観光総合窓口としての役割に重点を置いており、物販については町内のアンテナショップとして特産品を販売しています。40ほどの団体や個人が野菜やお土産品などを持ち寄って販売するスタイルで、売り上げは全体で1億円弱です。温泉熱を利用して野菜やマンゴーが冬でもとれるので、これらも一つの魅力になっていると思います。

また、弟子屈町は摩周湖、屈斜路湖、硫黄山など観光名所が多く、レストハウスや土産品店などに道内の代表的な土産品を置いています。そこで、「道の駅」では地元産品に加えて、釧路・根室管内の「道の駅」と連携し、海産物などの加工品や各駅の商品を販売しています。標津町や厚岸町、海産物、鶴居村や別海町の乳製品など、広域の商品を扱っているのが特徴です。

リニューアル後は近隣市町村の客も増えましたが、中心層は観光客なので情報発信を軸にして、域外のお客さまに町内で消費してもらうことを意識した運営をしています。食事は提供せず、テイクアウトのみにしているのも、町内の飲食店に誘導するためです。休憩、情報発信、地域の連携という「道の駅」の三つの要素を主軸にして運営しているのが大きな特徴で、そこが現在主流になっている特産品などを多く扱う「道の駅」との違いです。

当町も周辺の住民が雑草を摘んでくれたり、ごみ拾いをしてくれるなど、自主的に行動してくれています。「道の駅」のように華やかな空間ができると、それが自信になって、行動を起こしてくれる効果もあったと思っています。

小磯 直売所の充実は、最近の「道の駅」の大きな特徴ですね。

原田 農産物直売は苦情もあるので、品質管理委員会のようなものがしっかりしていないといけません。

徳永 売った人に責任を取ってもらうことが大事です。

片山 当町では職員を2年間派遣して、苦情がきたらイエローカードやレッドカードのような形でしっかり提示して、あまりにひどい場合は出荷を停止させたこともあります。

小磯 農産物直売では、農協との関係には気を使われましたか。

片山 立ち上げ当初は規格外品を置くことで、暗黙の了解というような関係でしたが、今は良好です。

徳永 当町も順調で、直売所の責任者は元農協職員、金融関係はすべて農協を通しています。

原田 当市では事務やPOSレジなどを農協が担っているの、当初から良好な関係です。

小磯 直売所などの売り上げは、自治体の歳入につながっているのですか。

片山 施設の使用料をもらっていますが、年間で数百万円程度です。

徳永 「道の駅」そのものが町の直営なので、逆に観光関連で歳出しています。

原田 当市は基本的に「道の駅」に行政は関与していません。運営費も出していませんし、直売所も農家の皆さんの協同組合で運営しています。

小磯 私は長く道東の阿寒湖温泉のまちづくりをお手伝いしていますが、15年4月から入湯税のかさ上げで独自財源を確保できる仕組みをつくりました。独自の安定財源を持ったことで、まちづくりの議論も一気に加速しています。「道の駅」の運営においても、ゆとりのある運営財源を確保していくことは今後の大切なテーマであるように感じています。

インバウンドの対応に向けて

小磯 外国人観光客の増加で、ニセコビュープラザは情報提供機能の期待が高まっていると思います。

片山 wifiは早くに整備しており、多国語で対応できるスタッフもいますが、それは同感です。倶知安町ひ

らふ地区にはコンドミニウムが林立していますが、その宿泊客や小さな宿を経営している人などが直売所をよく利用しています。外国人観光客と農家の皆さんが直接つなぐと、経済の活性化にとっても非常に大きなメリットがあると思います。

徳永 摩周温泉は観光総合案内窓口のゲートウェイ型の「道の駅」です。観光、気象、道路、宿泊などの情報提供、体験メニューの紹介や手配、移住に関することなどいろいろな相談に応じています。ヨーロッパの民具を展示していた施設をリニューアルしたので、写真展や陶芸展、絵画展など、地域文化を発信する交流スペースもあり、これも外国人にとって魅力の一つになると思います。英語スタッフも常駐しており、多言語表示も対応しています。

小磯 地域のインバウンド戦略として、「道の駅」に求められる役割はどう考えておられますか。

片山 驚くのは、レンタカーの利用が本当に多いことです。多言語表示やいろいろな工夫が大変重要で、中でも安心して駐車できるスペースは緊急の課題です。

ニセコ、蘭越、倶知安の3町では「ニセコエリア総合観光情報発信事業」というコンテンツの開発を進めています。エリア内にデジタルサイネージ（電子看板）やwifiの拠点を構築し、さまざまな情報を発信する仕組みです。例えば、スキー場コースのコンディションや天候、最近では夕食難民と呼ばれる人も出てきているので、それを解消できる情報を発信できれば有効だと思っています。

徳永 町内のレストハウスは免税措置に対応できるようになったので、今後は「道の駅」にも導入しなければと思っています。

インバウンドの伸びは、道央圏に比べるとまだまだですが、道東自動車道の白糠インター開通後の連休は、大変な渋滞でした。2016年3月に阿寒インターが開通すると、さらに車の流れが変わると思うので、期待しています。

小磯 恵庭市はどうですか。外国人観光客は8割以上が新千歳空港を利用しているといえますので、大き

な可能性があると思います。

原田 市内には「道の駅」だけでなく、「えこりん村」や水芭蕉の景勝地「カリンバ自然公園」など外国人にも発信できる空間があるのですが、積極的な対応はまだまだです。先日台湾に行ってきましたが、多くの



人が北海道を訪問しており、投資してもらえるチャンスも十分にあると感じました。また、恵庭市は新千歳空港到着後や帰りがけに立ち寄るなど、予定が組みやすいので、地理的にも今後の可能性は大きいと思っています。

小磯 インバウンドを意識した「道の駅」の運営はこれから大きなテーマの一つですね。

ところで北海道の「道の駅」は、駐車場整備、看板設置や入り口の道路整備など北海道開発行政のサポートがあって、運営はそれぞれの地域が責任を担うというスタイルですが、そのような行政支援の仕組みについて、どのように思われますか。

片山 「道の駅」もそうですが、シーニックバイウェイも非常によい仕組みだと思っています。

徳永 シーニックバイウェイと連携して、さらに「道の駅」の有効活用ができると思います。また、摩周温泉の場合は釧路川を挟んで水郷公園があるので、これをうまくつなげて発展させていきたいと思っています。

原田 花ロードえにわは、国道と北海道開発局が管理する河川がちょうど重なったところだったので、河川行政の支援もいただきました。漁川には魚道が整備されていて、サケが自然産卵し、秋になるとのぼってきます。橋の上から見ると、すごい光景です。

小磯 道路と河川行政との連携で魅力ある空間を作

り出したのですね。

共通の課題は、駐車場の狭さ

小磯 それぞれの「道の駅」で課題やご苦労もあると思いますが、現在の課題は何ですか。

片山 駐車場が狭いことです。SNSなどで「ニセコビュープラザは駐車場が満杯だから寄らない」という情報が流れることもあります。連休になると駐車場入り口の国道も道道も渋滞し交通安全上の問題もあるため、現在拡張の検討をしているところです。また、オープンから20年近く経つので、そろそろトイレなどの二次改築が必要になってきています。

徳永 摩周温泉の場合は温泉地なので、観光地の玄関口という点で、「道の駅」でのおもてなしをどう考えるかということが大きな課題です。できるだけ町内の民間事業者に消費を振り向けたいという考えから、レストランなどを併設していないので、帰ってしまう人もいます。駐車場も狭く、対策を考えなければならない状況です。

当駅は『じゃらん』の読者アンケートランキングで、2015年に1位になりましたが、おもてなしの心を持って、清潔なトイレ、町民みんなで取り組む清掃活動などを継続していくことが大切です。特に、釧路管内には阿寒国立公園と釧路湿原国立公園があり、さらに知床もあります。自然環境豊かな観光地の中で、人が住んでいるところなどをどのように見せていくのか。そこに取り組まなければ、一級の観光地にはなれません。宿泊施設などの改善点もありますが、それらを「道の駅」の運営と連動して解決していきたいと思っています。

原田 当駅も駐車場が狭いという指摘を受けるので、広くしなければならぬと思っています。また、夏はキャンピングカーの駐車が多く、そこで宿泊している人たちのごみの問題なども出てきています。インバウンド向けの多言語表示も今後はやっていかなければなりません。

これからの「道の駅」のあり方

小磯 最後に、これからの「道の駅」の役割や方向性についてお考えをお聞かせください。例えば、東日本大震災以降、防災機能を担っていく役割や観光情報だけでなく、幅広い情報提供も必要になってきているように思います。

原田 防災面では、恵庭市は北に大都市・札幌、南に苫小牧市があり、さらに新千歳空港があるので、大災害があったときの供給拠点のような役割を果たせると考えています。東日本大震災では岩手県遠野市がその役割を果たしましたが、もし札幌で何かあれば、恵庭市はバックアップ機能を果たせると考えています。ただ、「道の駅」の駐車場があまりにも狭く、今後はそれに対応できるような施設整備が必要だと思っています。

また、多くの人に来てくださっているのも、ワンステップ上を目指して花の観光拠点にしたいと考えています。今、計画を練っているところですが、「花のまち恵庭」にきたことを深く実感してもらえるような拠点づくりを目指しています。

徳永 摩周温泉は温泉熱暖房なので常に暖かいのですが、昨シーズンは大変な豪雪で、「道の駅」に避難して宿泊したという人が結構いて、防災拠点としての価値が浮き彫りになりました。「道の駅」には気象や



道路、宿泊の情報が集約されており、英語と中国語にも対応できるので、災害時はインバウンド向けに情報提供も可能です。特に、当町はアトサヌプリ（硫黄山）が「火山防災のために監視・観測体制の

充実等が必要な火山」の一つに指定されており、阿寒横断道路もあるので、防災拠点の機能は充実させていく必要があると思っています。

片山 北海道は冬場の異常気象が多く、何かあれば身動きが取れない状況になるので、そのときに「道の駅」の役割は大きいと思います。ニセコビュープラザには北海道開発局の防災備品庫を置いていただいています。当駅は狭く、避難する場所がないのが大きな悩みです。実際に異常気象になると20~30台駐車していますが、車から降りても集まる場所がないのです。

また、今後は情報収集館のような機能も必要だと思っています。町内にコミュニティFM「ラジオニセコ」がありますが、ラジオで防災や観光情報を入手する人は多いと思います。そこで、ラジオニセコをもっと充実させて、「道の駅」の機能とうまく結び付けたいと思っています。外国人パーソナリティーもいるので、外国人観光客の皆さんにニセコの魅力や入浴マナーなどの情報を、宿泊施設に向かう間に入手できる仕組みやコンテンツを開発したいと思っています。

原田 当市にも「e-niwa (いーにわ)」というコミュニティFMがあり、花ロードえにわにサテライトスタジオがあります。防災時にはこれを有効に活用できと思っています。

小磯 コミュニティFMは重要な地方のインフラの一つですね。通行止め情報などをいち早く発信することで、観光バスの行程も機動的に対応できます。最新情報を道路管理者から連絡を受けて放送するルールを作った観光地もあると聞いています。こういう動きをうまく「道の駅」の防災機能と関連付けて、発展させていくことが大切ですね。

徳永 「道の駅」は、防災拠点としては最高の空間です。実際に泊まった人たちから、安心してゆったりできたという声を聞きました。「道の駅」がなければ、コンビニに行くことになるのですが、限界があると思います。

小磯 「道の駅」が公共財であるという点が大きなポイントです。防災議論の中では、広域的な連携分担や役割の整理も必要だと思っています。

原田 北海道全体でいろいろな災害のシミュレーションをしていると思うので、その中で「道の駅」の配置とそれぞれの役割を考えていくことが大切だと思います。

小磯 国土強靱化の議論と合わせて考えていくべきだと思いますが、現場から声を出していくことも必要でしょう。地域防災計画で「道の駅」をしっかり位置付けるとともに、広域的な強靱化計画などと連動させていくような考え方が必要です。北海道や国の立場からもぜひ考えてほしいと感じます。

片山 全道の「道の駅」は、光ファイバーでつながっていると聞いていますので、それを有効活用することも考えてみるべきだと思います。

小磯 今日は「道の駅」の役割や今後の可能性などについて、皆さんから貴重なお話をお聞きできました。

「道の駅」での農産物直売の成功経験は、生産者が直接市場に向き合う機会を持ったことで、従来の農協に支えられていた農産物販売の仕組みを変化させた意義があるように思います。これは北海道農業の活性化や多様化に寄与していくことにもなるでしょう。さらに北海道では、水産の分野でも直売などに挑戦していく拠点として、「道の駅」が果たせる役割があるように感じます。

域内需要が縮小していく人口減少時代においては域内で資金を循環させ、経済需要を高めていく努力が一層大切ですが、「道の駅」の農産物や水産物直売は、地元で生産したものを地元で消費するという域内連関力を高める役割も担っています。

また、インバウンドを含めた外からの観光客の利便性と消費を高めていく拠点の役割も大きくなっています。これに防災機能が加われば、安全・安心な地域づくりの拠点という役割も担えます。そこでは、より広域性の高い機能も意識した新たな「道の駅」の政策展開が望まれているように感じました。皆さん、今日はありがとうございました。

PROFILE

片山 健也 (かたやま けんや)

1953年赤井川村生まれ。(株)エコープライン(現全農物流(株))を経て、78年ニセコ町役場入庁。町民総合窓口課長、総務課参事、会計管理者、教育委員会学校教育課長を歴任し、2009年7月ニセコ町を退職。同年10月ニセコ町長に就任、現在に至る。著書に『自治基本条例は活きているか!?!』(共著)など。

徳永 哲雄 (とくなが てつお)

1949年弟子屈町生まれ。81年弟子屈町農業委員会委員、87年同会長、91年摩周農業協同組合代表理事組合長、2000年摩周湖農業協同組合副組合長。同年12月に弟子屈町長に就任。公職に釧路町村会副会長、北海道運輸交通審議会委員、北海道国土調査推進連絡協議会会長、北海道地区「道の駅」連絡会副会長など。

原田 裕 (はらだ ゆたか)

1952年三笠市生まれ。76年恵庭市役所入庁、86年同退職、神田館入社。93年(有)ハラダ代表取締役就任。95~2009年北海道議会議員。09年11月恵庭市長就任、現在に至る。公職に北海道新幹線建設促進札幌圏期成会監事、北海道千歳川水系治水連絡協議会会長、北海道地区「道の駅」連絡会会長など。

小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

1948年大阪市生まれ。京都大学法学部卒業後、北海道開発庁(現国土交通省)に入庁。99年釧路公立大学教授、地域経済研究センター長。2008年同大学学長。13年9月から北海道大学公共政策大学院特任教授、現在に至る。公職に国土審議会専門委員など。

「道の駅摩周温泉」



DATA

住所：弟子屈町湯の島3丁目5-5
立地：国道241号沿い
登録：1993年4月

主な施設

ライブカメラ、観光案内、休憩スペース、ギャラリー、イベントコーナー、特産品販売所、足湯、ドックランなど

運営主体

弟子屈町（インフォメーションは観光協会、特産品販売は任意団体への場所提供）

年間来館者数

25万3千人（2014年度）

施設全体の年間売上

9,500万円（2015年度見込み）

地域の総合案内を重視

1990年10月に摩周湖温泉観光案内所としてオープンし、93年4月に全国103カ所、道内14カ所登録された最初の「道の駅」の一つです。2011年7月にリニューアルオープンし、敷地内に足湯やドックランなどが整備されました。また、町民の任意団体が運営する特産品販売所も設けられ、団体や個人が野菜や土産品などを持ち寄って販売しています。リニューアル後は、滞在時間の延長（平均30～40分）や利用者の増加、観光客だけでなく、町民や近隣市町村の客も増えるなどの効果が見られています。

町内には摩周温泉、摩周湖、屈斜路湖、硫黄山など多くの観光地があることから、地域の総合案内としての機能に重点を置き、ライブカメラや観光・宿泊案内、アクティビティの手配にも対応しています。

館内施設やトイレは温泉暖房で、太陽光発電の導入、温泉を活用した温度差発電による屋外のイルミネーションなど、エコエネルギーも積極的に活用し、環境に向き合う地域の姿勢も発信しています。



摩周温泉ならではの足湯コーナー



特産品販売のコーナー

「道の駅ニセコビュープラザ」



DATA

住所：ニセコ町字元町77番地10
立地：国道5号沿い
登録：1997年4月

主な施設

情報プラザ棟（町の総合案内所、情報発信、物販）、フリースペース棟（農産物直売所、ショップコーナー）、トイレ棟

運営主体

(株)ニセコリゾート観光協会

年間来館者数

約130万人（トイレのみの利用も含む）

施設全体の年間売上

約3億円

先駆的に農産物直売を導入した「道の駅」

ニセコ町市街やニセコ山系への入り口であり、国道5号と道道岩内洞爺線が交差する立地条件にあり、広域的な集客力を誇る「道の駅ニセコビュープラザ」。全国で初めて株式会社化された観光協会が管理運営し、地元商品も積極的に販売しています。

中でも人気なのが、農産物直売所です。1997年に7戸の農家から始まり、翌年にニセコビュープラザ直売会を組織。現在は70戸ほどの農家が参加しています。POSシステムの導入後、独自に「これだす」システムを開発し、2005年から導入したことで、欠品を防ぎ、大量注文への対応などができるようになりました。農産物直売所のアイテム数は500以上といわれており、冬季も根菜や加工品など、個々の農家が品ぞろえを工夫し、通年で営業しています。

国際リゾート・ニセコのインバウンド観光対応拠点として重点「道の駅」にも選ばれており、観光コンシェルジュなどによる情報機能の拡充と、観光と農業を結びつける場の創出に向けて取り組みが始まっています。



冬でも豊富な品ぞろえを誇る農産物直売



観光協会の努力で町内の加工品も充実

「道の駅花ロードえにわ」



DATA

住所：恵庭市南島松817番地18
立地：国道36号沿い
登録：2005年8月

主な施設

地域交流センター（休憩・飲食コーナー、ベーカリー、情報コーナー、観光案内、園芸雑貨）、多目的交流物産館（農畜産物直売所、イベントスペース）

運営主体

（一社）恵庭観光協会

年間来館者数

約138万人（入館時のセンサーカウント及びレジカウントによる2014年度の推計）

施設全体の年間売上

約6億円

「道と川の駅」機能と花のまちの拠点

2005年に登録された「道の駅花ロードえにわ」。国道36号と市のシンボルである漁川^{いさりがわ}がある交差点に位置しており、隣接する漁川河岸に多目的広場（ウォーターガーデン）が整備されているので、地元では「道と川の駅」と呼んでいます。恵庭市には個人宅の庭を見学できるオープンガーデンがあり、花のまちとして知られていますが、この特徴を生かして花時計をはじめ花を活用した空間の演出も魅力です。花の手入れは市民ボランティアによって支えられており、オープンガーデンめぐりの拠点にもなっています。

恵庭かのな協同組合（当初は恵庭農畜産物直売所運営協議会）が運営する農畜産物直売所「花野菜」を目当てに、地元客が多く訪れていることも特徴の一つ。別棟の地域交流センターでは、地元特産の「えびすかぼちゃ」を使った菓子やパンなどが販売されていますが、農商工連携で開発した商品を販売するアンテナショップの役割も担っています。「道の駅」の運営主体である（一社）恵庭観光協会と経済団体の恵庭商工会議所が連携して取り組んでいることが力になっています。



農畜産物直売所「花野菜（かのな）」の店内



子どもたちでにぎわうウォーターガーデン